

## 曾孟樸の初期翻訳(上)

樽本照雄

### 1 大デュマ「王妃マルゴ」について

曾孟樸(1872-1935)は、いうまでもなく小説「孽海花」(1905)の著者として有名だ。劉鉄雲、吳趼人、李伯元らとあわせて特別に清末の4作家とも呼ばれている。

年齢的にいえば、ほかの3人よりも孟樸のほうが少し若い。著述活動をへて1911年の辛亥革命をはさむ時期には政治活動に従事した。その後、著作と翻訳にふたたびもどる。並行して、息子虚白と一緒に出版社を経営し雑誌を編集刊行した。

曾を除いた3人は、清朝末期に没している。ちなみにそれぞれの生没年を示してみよう。李伯元は1867-1906年(享年四十)、劉鉄雲は1857-1909年(享年五十三)、吳趼人が1866-1910年(享年四十五)だ。孟樸は民国24(1935)年に逝去したから(享年六十四)、それだけ文学界において長く活躍したといえることができる。

曾孟樸は、フランス語を学習した経験を持つ。フランス作家の作品を、なかでもユゴーを中心に漢訳し複数を刊行している。清末から民国という時期に、作家であり同時に翻訳者だった。フランス語原書にもとづいて漢訳した人、しかも作家である例はそれほど多くはない。当時、林紘による外国小説の翻訳がやつぎばやに刊行されはじめたから、どうしてもそれと比較してしまう。

林紘が大量の外国小説を漢訳することができたのは、複数の共訳者がいたからだ。私はそれを「翻訳工房」と呼んでいる。この表現に負の意味を込めない。翻訳をするにも各種の形態があってもいいと考えているからだ。

林紘に共訳者がいたということは、周知のように、彼自身が外国語を理解しなかったからである。外国語のできる共訳者が口述翻訳する。林紘は、それを聞きなが

ら文言（文語）で筆記する。研究者のほとんどは、この共訳方法をまるであってはならないように批判する。翻訳は、外国語を理解する人がすべての作業をひとりでこなすのが当然だといわんばかりだ。林紓たちが生きた時代の制約があるだろう、と私は考える。だが、それについて考慮する人はあまりいない。

私が見るところ、翻訳工房だったからこそ、世界各国の作品を漢訳することができた。林紓は、外国語の種類にとらわれずにすんだ。読者の多くは、林訳をとおして世界文学がどのようなものかを知る機会を得た。正の方面をいえばそうなる。負の側面に目を向ければ、出てくる翻訳作品は逐語訳にはならない。共訳者を通じての間接的な翻訳である。誤訳、省略が生じるのもやむをえない。直訳を主張する人から見れば、それが林訳の大きな欠点になる。

もっとも、外国語を理解する人が自分で漢訳するにしても、間違いは発生する。翻訳にはつきものだ。それをきびしく非難すれば翻訳そのものが成り立たない。

本稿では、曾孟樸が漢訳したフランス文学作品を検討する。ただし、全面的なものではないことをお断わりしておく。本稿では孟樸の初期翻訳2種類をあつかう。

清末ではアレクサンドル・デュマ Alexandre Dumas（ペール père。以下、大デュマと称する）の「王妃マルゴ」を、民初ではヴィクトル・ユゴー Victor Hugo の作品を対象にする。後者のユゴー「九十三年」については、比較のために林訳も必要に応じて参照したい。

曾孟樸のフランス語学習から話をはじめよう。

## 曾孟樸と陳季同

曾孟樸が翻訳に関係して往事を回想した文章がある。病夫「復胡適的信」（「読者論壇」『真美善』第1巻第12号1928.4.16）だ。胡適からの手紙を同時にかかげ、翻訳について論じた往復書簡である。孟樸がフランス文学に傾倒していったいきさつを述べていることで知られている。

以下は、孟樸の該文にもとづき、それから抜粋しながら紹介する。

曾孟樸がフランス語を学びはじめたのは、日清戦争が終了する1895年秋だった\*1。北京の同文館において八ヶ月間文法の基礎を学んだ。あとは三年間の独学によりアナトール・フランスの作品を読むまでになる。そして陳季同と知りあった。

陳季同（1852-1907）は、福建侯官（今の福州）の人。福州船政学堂において学んだのち、ヨーロッパの外交畑で16年間仕事をつづけた。その間フランス人女性と

結婚し、勤務の最後は金銭問題にまきこまれたという\*2。

陳季同はフランス人文学者との交流があり、またフランス語の著作を多数刊行していた。1898年、曾孟樸が会ったのは、そのような人物だ。毎日のように教えを請うた。フランス文学について本格的に学ぶまたとない機会となる。孟樸にとって、陳季同はいわばフランス文学の私的な指導教授であった。系統的な翻訳を行なう必要があるという曾孟樸の主張は、その時に得た知識にもとづいていると思われる。

### 林紵翻訳の出現と曾孟樸

曾孟樸がフランス文学の勉強をつづけていたころ、梁啓超が日本で『新民叢報』(1902)と『新小説』(1902)を創刊した。

孟樸がそう書いて誌名をあげているのだから、彼は該当の雑誌を読んでいるのだろう(『清議報』には言及がない)。翻訳では林紵+王寿昌の『巴黎茶花女遺事』(1899。小デュマ作『椿姫』)もすでに出ている。それらに刺激を受けた曾孟樸は、丁芝孫、徐念慈らの友人と資金を集めて小説林(社)を創設した。単行本の出版と雑誌『小説林』を刊行する。少しのちに宏文館(書店)を併設したのは、学校教材を手がけるためという。

小説林社は、名称からして小説を専門に出版する組織だとわかる。小説林社の初期刊行物を目録で見ると、たしかに翻訳物が多い。1903年からはじまっている\*3。出版物には、どのような傾向があるのか。初期に刊行された書名のほんの一部分を目録から抜き出すとつぎのようになった(出版社名の小説林社は省略する)。

『俄国情史(又称斯密士瑪麗伝 花心蝶夢録)』

(俄)普希金 戢翼翬訳 1903

Pushkin 著「大尉の娘」1836。プシキン原著、高須治助訳述『露国奇聞花心蝶思録』法木書店1883.6。改題して『露国稗史 スミス、マリー之伝』高崎書房1883.6/1886.11.20再版(表紙の角書は露国情史)

『十五小豪傑』18回

(法)焦士威爾奴原著 飲冰子(梁啓超)、披髮生(羅普)合訳 1903

Jules Verne “DEUX ANS DE VACANCES” 1888。ジユールスヴェルヌ著、森田思軒訳『十五少年』博文館1896.12.18の重訳

『(福爾摩斯偵探第一案 偵探小説)大復仇』

(英 柯南道爾著) 黄人潤辞 奚若訳意 甲辰6(1904)

Arthur Conan Doyle “ A STUDY IN SCARLET ” 1887.12

『恩仇血』

柯南道爾著 陳彦訳 光緒甲辰(1904)

Arthur Conan Doyle “ A STUDY IN SCARLET ” 1887.12

『秘密使者』 2冊

(法) 迦爾威尼著 天笑生(包天笑)訳 光緒甲辰(1904)

Jules Verne “ MICHEL STROGOFF DE MOSCOU A IRKOUTSK ” 1876。英

訳 “ MICHAEL STROGOFF ”。ヴェルヌ著、羊角山人訳述、森田思軒  
刪述「盲目使者」『郵便報知新聞』1887.9.16-12.30。改題『警使者』報  
知社 上1888.5.15 / 下1891.11.2

『双艶記』13回

(英) 仏露次斯著 小説林社訳印 光緒甲辰(1904)

『唾旅行』2冊

(日) 末広鉄腸著 黄人(黄摩西)訳 光緒甲辰-丙午(1904-1906)

末広鉄腸『唾之旅行』前後続編、青木嵩山堂1889.12-1891.9

ヴェルヌものといっても、日本語訳からの重訳だ。プーシキン作品も日本語訳にもとづいている。ドイルのホームズものは、英語原書からの翻訳だろう。

曾孟樸がいくら外国の文学作品を系統的に翻訳刊行したいと願っていても、そのまま実現するのはむづかしい。刊行された上の書名を見ればおおよそがわかる。出版社の経営を維持するためには、読者の好みにあう作品を出版する必要があった。

曾孟樸は、それについてつぎのようにわざわざ説明している。「小説林書店をはじめたとき、外国小説の翻訳は、まだ10種に満たなかった。残念ながら、当時は販路拡大のためにだけ、コナン・ドイルの探偵ものを重視したのです」

孟樸は、ヴェルヌには触れずドイルものだけをとりあげる。弁解したくなるほど嫌っていたらしい。だが、読者の好みを無視することができなかったことを事実が説明している。

みずからの文学的信念にもとづいた翻訳小説を刊行することができない。それでは何のための出版社(書店)経営か、と問われるだろう。曾孟樸ひとりだけの出資ではない。共同経営だから孟樸にとっては不本意な結果になった可能性もある。そ

う考えれば、のちの1920年代に息子虚白とともに真美善書店を創設し、書籍の出版と雑誌『真美善』を刊行する理由もわかるような気がする。こちらは、まさに曾孟樸の個人経営だ。ひとりで自由に編集の采配をふるうことができる。

林紓の漢訳が商務印書館から刊行されはじめるのは、小説林社の出版活動とほとんど同時期だといっている。

どういう作品が刊行されたのか。紹介しようところちも目録から抜き出しはじめると大量すぎてあふれる。1903-1905年にしばって機械的に選択してみた。それでも以下のようになる（出版社名の商務印書館は省略）。

『（希臘名士）伊索寓言』

AESOP 林紓、巖培南、巖璩同訳 光緒二十九・五(1903)四版

『（英国詩人）吟辺燕語』

（英）莎士比著 林紓、魏易同訳 説部叢書一=8 光緒三十・七(1904) / 光緒三十二・四(1906)三版

Charles Lamb, Mary Lamb “TALES FROM SHAKESPEARE” 1807

『（神怪小説）埃及金塔剖屍記』3巻上中下巻

（英）哈葛德著 林紓、曾宗鞏訳 光緒三十一・三(1905)

Henry Rider Haggard “CLEOPATRA” 1889

『（言情小説）迦茵小伝』上下巻

（英）哈葛德著 林紓、魏易訳 光緒三十一・二・十三(1905.3.18)

Henry Rider Haggard “JOAN HASTE” 1895

『（神怪小説）鬼山狼侠伝』36章2巻上下巻

（英）哈葛德著 林紓、曾宗鞏訳 1905.6 説部叢書三=2

Henry Rider Haggard “NADA THE LILY” 1892

『（倫理小説）英孝子火山報仇録』上下巻

（英）哈葛德著 林紓、魏易同訳 光緒三十一・六(1905)

Henry Rider Haggard “MONTEZUMA'S DAUGHTER” 1893

『（冒険小説）斐洲烟水愁城録』上下巻2冊

（英）哈葛德著 林紓、曾宗鞏合訳 光緒三十一・十(1905)

Henry Rider Haggard “ALLAN QUATERMAIN” 1887

『（国民小説）撒克遜劫後英雄略』2巻上下冊

(英)司各徳著 林紓、魏易訳 1905.10 / 1906.4再版 説部叢書三=7  
Walter Scott “ IVANHOE ” 1820

『(言情小説)玉雪留痕』

(英)哈葛徳著 林紓、魏易同訳 光緒三十一年季冬(1905)  
Henry Rider Haggard “ MR. MEESON'S WILL ” 1888

短期間にこれほど多くの翻訳が刊行された。曾孟樸が驚くのもあたりまえだ。こういう状況が、以後ほぼ20年間も続く。林紓は1924年に死去する。だが、その後も彼の翻訳は公表されつづける。多くの読者から長く歓迎された証拠だ。

林紓が商務印書館と特別の出版契約、つまり専属契約を結んだと説明する人もいる。

商務印書館からの出版が多いのは事実だ。しかし、それしかないというわけではない。単行本だけでも、1902年普通書室から1点、1903年大学堂官書局から2点、1904年広智書局から1点、同年文明書局から3点、1905年北京・学務官書局から1点、というように刊行されている。だから専属契約というのは、適当ではない。商務印書館発行が目立つので出てきたウワサだと私は考える。

以上の翻訳は、すべて林紓の名前を冠している。ほとんど超人的な仕事量ではなかろうか。

結局のところ、林紓は200点をこえる外国文学を翻訳した。この事実を前にして私はただ感嘆するばかりだ。いくら共訳者が複数いたにしても(だから「翻訳工房」だ)、林紓の集中力と持続力は普通ではない。しかも林紓は、翻訳のほかに詩、散文、創作作品、絵画の分野にまでその才能を発揮している。林紓は、若いころの肺病をかかえていた。そういう健康状態からいっても、やはり尋常ではないくらい旺盛な執筆活動だといえる。

上にあげた林紓の翻訳にもういちど目をむければ、ハガードものが多いとわかる。その中であって、ラム姉弟の『シェイクスピア物語』、あるいはスコットの『アイヴァンホー』が目立つ。

曾孟樸はそれらを見て、つぎのような感想をのべた。

畏廬(林紓)氏は、古文の筆の運びで欧米の小説を翻訳する、つまり時代劇の服装で新劇を演じたのです。私は、はじめに出た英国スコットの作品を数冊

見ましたが、いずれも数十万字の巨作で、数ヵ月にもならないうちに次々と翻訳されて、非常にうれしく、これから私は孤独ではない、中国には系統的な翻訳事業があって、かならず彼が実現するだろうと考えました。出るたびにいつも買ってきて読んだのですが、徐々に気づいたのです。彼には基準がない。すなわちハガードの作品のようなものがあまりにも多すぎますし、さらには文学的価値のまったくない作家の作品も同じように丁寧にやっています [ 并且有些毫無文学價值作家的作品，也一樣在那裏鉤心鬪角的做 ]。私は彼のためにとても残念に思いました。

スコット作品は、上の『アイヴァンホー [ 撒克遜劫後英雄略 ] 』以外ではつぎの2種類がある。同じく林紓と魏易の共訳になる『(軍事小説) 十字軍英雄記』(光緒三十三・三(1907) “ THE TALISMAN ” ) および『(言情小説) 劍底鴛鴦』(光緒三十三・十一・四(1907.12.8) “ THE BETROTHED ” ) だ。曾孟樸がいうのは、これらの翻訳になる。

「系統的な翻訳」ということばからわかるように、曾孟樸がめざす翻訳は、最初から厳密な計画がなくてはならなかった。しかも、それにはいわゆる大衆小説は含まれていない。

ハガード作品など曾孟樸の眼中にはなかった。ドイルの作品も同様だ。その事実、ある翻訳目録に見ることができる。作品の選択基準が示されている。ほぼ同じものだが、ふたつともに紹介しよう。

ひとつは、(曾) 虚白「中国繙訳欧美作品的成績」(『真美善』第2巻第6号1928.10.16) だ。欧米の作品198種を収録する。ただし、ハガード、ドイル、ルブランなどの作品は「34等の作家だから」収録しない。意図的に削除した、とわざわざ説明している。

この目録は、欧米の作品が中心にすえられた。これに日本とインドを追加したものが(曾) 虚白原編、蒲梢(徐調孚) 修訂『漢訳東西洋文学作品編目』(真美善書店1929.9.28) である。曾孟樸と虚白の父子で経営する真美善書店から刊行した目録だ。

この「編例」にもつぎのように明記してある。「3. 訳本取捨の標準は、原作の価値を基準とする。ゆえにハガード、コナン・ドイル、ルブランなどの34流作家の作品は一律に採らない」

父孟樸の見解が、目録を編纂した虚白に影響をあたえたと考えていい。大衆小説

はその文学的価値が低い。具体的な作家の名前までかかげて排除する。私にいわせれば、曾孟樸の好みではなかった。この見方は、基本的に現在までつづいている。文学史に同じ記述がなされているという意味だ。

興味深いのは、胡適にあてた書簡に見る曾孟樸の説明である。

孟樸が残念に感じているのはなにか。彼が考える文学的価値のまったくない作家の作品について、林紓がむだな努力をしたことだった。曾孟樸の見るところ、価値のない作品は翻訳すべきではなかった。その意見も、聞いたことがある。あれは、この曾孟樸書簡から数えてちょうど10年前の1918年だ。劉半農が林紓を批判して価値がないとした。同じではないか。鄭振鐸も、それをくり返して強調した。

私が注目するのは別の箇所だ。見てほしい。林紓は価値のない作品であっても丁寧に翻訳をしている、と曾孟樸はいう。

たしかに、そこには揶揄する気持ちが見え隠れする。しかし、逆説的な説明になるが、林紓は、外国作品を内容によってわけへだてしない、手を抜くことなく全力をつくしてまじめに翻訳している。孟樸が、そう保証しているのとかわらない。

曾孟樸は、林紓の作品選択に基準がない、と批判した。また、文言を使用したことについて「時代劇の服装で新劇を演じた」と説明する。軽んじる意図はある。ただし、その真摯な翻訳姿勢については肯定しているとわかる。

上記引用文の続きが、あの有名な林紓訪問記だ。曾孟樸は、北京に居住する林紓にわざわざ会いに行った。あとで触れたい。

## 曾孟樸と大デュマ

曾孟樸らの創設になる小説林社は、彼の『孽海花』(1905)を刊行した。一般に知られる創作といえこれくらいで、ほかは外国小説の翻訳だった。上にあげた書名をご覧いただきたい。

上海では、ほとんど同時に商務印書館が翻訳小説を刊行しはじめていた。これは、のちに「説部叢書」と名称がつけられ、収録作品を増加させながらまとまっていく。

「説部」は小説という意味だ。だから翻訳とは限らない。また、商務印書館が独占的に使用する呼称でもない。群学社、小説改良社、小説進歩社なども「説部叢書」と銘打った書籍群を持っている。だが後には、「説部叢書」といえば、商務印書館が刊行する外国小説の翻訳叢書のことだと広く認められるようになった。1924年までに刊行されたその数は、322種にのぼる。ほかの出版社を圧倒する多量

像馬仲大家學文法



Alexandre Dumas Père

林 說 小

文學家乘

大仲馬傳 Alexandre Dumas Père

小仲馬附

仲馬者亞歷山大氏十八世紀法蘭西之大文豪也。以小說戲曲傾動一世。爲人嶽崎。歷落不屑。屑以繩尺自檢。文亦頗肖。之父將軍仲馬。母藍布蘭。Joubert 爲某旅館主女。將軍以驍勇聞。法帝拿破崙愛重之。將軍父侯爵潘蘭德。Pellieuri 娶西印度黑種人名魯意仲馬者爲妻。將軍生襲母姓。巴黎人以其系門閥於賤族。輒詬誚之。將軍傲兀自意。不遂轉阿權要。時或以顏色犯拿破崙。拿破崙漸惡之。疑其貳已。從征埃及時。立罷斥之。將軍既廢。邑鬱不得志。隱於維勒高德城。Villers-Cotterets 以一八〇六年歿於家。時仲馬生僅四齡也。賴寡母撫之。得長成。仲馬少即仗蕩。浪游。自恣。雅不問家。人生產中。雖具逸才。顧性善遷。稍涉獵。即厭棄。謂爲不足學。故終未竟一業。

大學家乘

豔曲當筵妙譽馳。平生應悔奧倫知。季長西第伯啾哭。一樣傷心入幕時。

豪情落拓三鎗卒。哀史蒼涼巖窟王。即水晶島日本黑岩淚香譯作巖窟

王 遙想一篇初跳出。拂箋應讓梵莉娘。

纂大仲馬傳脫稿後。即書其後。並題小像。

東亞病夫

の翻訳を長期間にわたって刊行しつづけた結果である。

商務印書館が刊行した翻訳のなかでも、林訳は群を抜いて数が多い。彼は、1903年頃からせきを切ったように翻訳を大量に発表しはじめた。こちらを上記の書名を見られたい。別に林訳ばかりを集めて「林訳小説叢書」にもまとめられている。

上にかかげた林訳を見れば、ハガードの作品が多くを占めているのがわかる。しかし、曾孟樸の説明によると、彼の目についたのはスコットだった。曾孟樸は、大衆小説に偏見を持っていたからである。とはいえ、外国小説が大量に発行され、それが読者に受け入れられているという出版状況は、曾孟樸にとってみれば歓迎すべきことに違いない。

では、当時、曾孟樸が興味を感じていた作家は誰で、どういう作品だったのか。それはフランスの大デュマだ。

曾孟樸が最初に公表した関連文章は「大デュマ伝」になる。孟樸は、雑誌に作家を紹介することからはじめた。

東亜病夫「大仲馬伝 Alexandre Dumas Pire」(『小説林』第5期 丁未(1907)年七月)がそれだ。

東亜病夫は、曾孟樸の筆名である。清末の作家は筆名を使用するのが普通だった。劉鉄雲は洪(鴻)都百鍊生を、呉趼人は我仏山人を、李伯元は南亭、南亭亭長などを用いている。林紓も冷紅生を使用したことがあった。

曾孟樸の文章は、雑誌の掲載を見ると「文学乗」を冒頭にかかげる。改行して「大仲馬伝」と小さい活字で組んであるということは、文学家系という連載を構想していたのだろう。

曾孟樸のばあいは、苦勞して学習したのがフランス語だった。ゆえにフランス文学に限定される。その文学的系統を紹介するつもりで最初が大デュマとも考えられる。つぎは、あるいはユゴーだったのか。それはあくまでも推測の域をでない。推測にとどまるのは、雑誌『小説林』を見ても続く文章がないことによる。

それにしても、いきなり大デュマだ。フランス文学全体の概略があって、個々の作家の説明がつづくというわけではない。曾孟樸は、系統的に作品を翻訳することを主張しながら、当初はその説明をしていない。孟樸の頭のなかでは順序だったのか、あるいは後年の回想だからなのか、そこは不詳だ。少なくとも読者から見れば、「大デュマ伝」が突然に説明抜きで出現する印象なのである。

大デュマの生涯と作品を紹介し、文言で書いてある。作品の漢訳には白話（口語）を使用しているから、このころの曾孟樸は、意識のなかで区別しているのかもしれない。論文は文言を、翻訳には白話を用いる、という使い分けだ。ただし、本稿でもうひとつの検討対象にしているユゴー「九十三年」は、文言だ（後述）。その使い分けについて曾孟樸は説明していない。

曾孟樸の書いた「大デュマ伝」は、評価が高い。ただし、もとになる文献があってそれを翻訳したのか、あるいは独自に資料を集めて書いたのかがはっきりしない。孟樸は、それについては何も言っていないのが事実だ。ただし、中国において研究者の下した評判がよい点で一致しているのは、注目してよい。

周瘦鵬が読んで感心しこれをことのほか好んだ、と時萌が紹介している\*4。

また、郭延礼も曾孟樸の該文について高い評価をあたえる。「中国の読者にこのフランスの著名な作家についてかなり系統的に紹介した」\*5と解説しているところからわかる。

「かなり[較]」と訳しておいた。辞書にある意味は、わりと、なかなか、などの控えめな表現だ。しかし、中国人研究者がこれを使用すると、「とても」と強調する意図をもつ。曾孟樸の「大デュマ伝」は大変よく書けている、と郭延礼は認めている。

中国の研究者が、それも複数でそろってほめているから興味深い。

考えてみれば、林紓はたしかに多くの外国小説を漢訳した。しかし、それぞれの原著者について詳しく紹介したかといえば、該当する文章を急には思いつかない。漢訳の序で簡単に触れることはある。だが、林紓についていえば、翻訳はしたが研究はしなかった。べつに研究をしなければならないという意味ではない。曾孟樸は林紓とは異なっている、といたいだけだ。

曾孟樸は、原著者について知識を深めながら作品を翻訳する。そういうところが孟樸の特色だといってもいいだろう。

#### 曾孟樸「大デュマ伝」

書き出し部分は、こうなっている（傍点は省略した箇所がある）。

仲馬者。垂<sup>マ</sup>歴<sup>マ</sup>山大氏。十八世紀法蘭西之大文豪也。以小説戯曲。傾動一世。為人嶽崎歷落。不屑屑以繩尺自檢。文亦頗肖之。父將軍仲馬母藍布蘭<sup>ママ</sup> Labourt

為某旅館主女。將軍以驍勇聞。法帝拿破崙夙愛重之。將軍父侯爵潘蘭德 Pailleteril<sup>ママ</sup> 娶西印度黑種人。名魯意仲馬者為妻。將軍生襲母姓。

デュマは、アレクサンドル氏、<sup>ママ</sup>18世紀フランスの大文豪である。小説戯曲により一時代を感動させた。人柄はそびえ立ちさっぱりとして、ささいなことにこだわらず、規則で自分を縛るということもなく、文章もまたまったくそれに似る。父はデュマ將軍、母ラブレは某旅館の主人の娘だった。將軍は勇猛で聞こえ、フランス皇帝ナポレオンはつとに愛し重用した。將軍の父パユトリ侯爵は、西インドの黒人を娶り名前はルイーズ・デュマというものを妻とした。將軍は生まれて母の姓をついだ。

大デュマの父親は、デュマ將軍だ。デュマ將軍が敵から「黒い悪魔」と呼ばれたのは、その母（大デュマの祖母）が黒人だったからだ。よく知られた話だろう。ただし、曾孟樸はそこまで説明はしない（ついでながら、大デュマの遺骨がパリのパンテオンに埋葬されたのは2002年だ。生誕200年目になる。時間がかかった理由は、彼が黒人の子孫だからである。差別があったと認められた）。

上の文章を見ると、大デュマの出自を簡潔に紹介しているということがわかる。ただし、いくつかの誤植、あるいは勘違いがある。

ここに見える18世紀は、19世紀の誤植だとだれでもが思う。ところが、曾孟樸は世紀の数え方について勘違いをしているらしい。該文の附録に「大デュマ著作目録 [大仲馬所著書目]」がある。作品「王妃マルゴ [馬高王后]」を説明するなかに、聖バルテルミーの虐殺（1573<sup>ママ</sup>[2]年）をさして15世紀のことだと書いている。同じような誤りがあるのを見ると誤植ではないとわかる。孟樸は誤解している。最初から細かいところでつまずく。

ついでながら、この論文を公表した翌年に漢訳「王妃マルゴ」を連載する。その時の漢訳名は「馬哥王后佚史」だ。訳名を「馬高王后」から「馬哥王后佚史」へと変更したとわかる。

人名が複雑だ。大デュマ本人から見た親族関係を示し名前を以下にまとめておく。

祖父アレクサンドル=アントワヌ・ダヴィ・ド・ラ・パユトリ侯爵 Marquis  
Alexandre-Antoine Davy de La Pailleterie

祖母マリ=セセット・デュマ Maie Cèssete Dumas

父トマ=アレクサンドル・デュマ Thomas Alexandre Dumas

母マリ=ルイーズ=エリザベート・ラブレ Marie-Louise Élisabeth Labouret

これに照らして曾孟樸の説明を見ると、祖母の名前が違う。ルイーズは母の名前だから、混同している。もとづく資料が間違っていたのか、孟樸の誤記か。どちらなのか不明とせざるをえない。

フランス語の綴りが誤植されるのは、ある意味でしかたがない。とはいえ、母の名前の一部を祖母に誤配置することとは問題が別だ。基本的な人名に勘違いがあるのはどうしたことだろうか。ささいな間違いであって大デュマ本人の経歴に大きくは影響しない。それはいうまでもないことだ。しかし、精確さに欠ける部分があることについて、私はいぶかる。

周瘦鵬は、この「大デュマ伝」がよく書かれていると感心したというのではないか。時萌、郭延礼も高く評価している。だから冒頭から基礎的な間違いがあるなどと私は思いもしない。間違いを除けば精確である、というか。まさかそのような冗談はありえない。だから、私にしてみれば、やや意外に思う。

早くに父を失った大デュマは、学業に興味もなくパリに出た。つてをたよって得たのがオルレアン公の文書係で年俸は「50ポンド [ 磅 ]」だ。ここで目がとまる。

フランスの昔の貨幣制度でトゥールポンド (livre tournois トゥールのリーヴル) はあった。そのことを意味しているのか。だが、ここはフランではいけないのか。ものの本によれば、1,200フランだった。金額も違うし、なぜポンドとするのかわからない。曾孟樸が扱った文献にそう書いてあったのか。疑問としておく (後述)。

大デュマは、まず戯曲を書いて成功する。他人との共作を含んでのことだ。1832年、ガイアルデの原作に大デュマが手を入れた「ネールの塔 LA TOUR DE NESLE」(孟樸はガイアルデの名前をださない。また、原文の“LA”を落とし「内士爾高樓」と漢訳する。漢訳題名はフランス語原音からずれている。孟樸のフランス語は発音するためではなく読むためのものらしい) が成功をおさめる。その結果、共作者は盗作されたと裁判所に訴えた。

私が少しつけ加える。そのあと、大デュマは、戯曲から小説に進出することにした。新興企業としての新聞社が、販路拡大を目的にして新聞に掲載する小説を求めていたことにもよる。

曾孟樸は、大デュマの多彩な女性関係についてはすべて無視した。なにも説明し

ない。

同じ多彩にしても作品の方面だけに注目する。なにしろ作品数が多い。「モンテ・クリスト伯〔水晶島之伯爵〕」「三銃士〔三銃卒〕」「二十年後〔漢訳も同じ〕」「王妃マルゴ〔馬高王后〕」「四十五人衆〔四十五衛兵〕」などなど。これらの題名をあげたあと、曾孟樸は特に1844年に刊行した作品の数をいう。すなわち、この1年間に40冊ばかりも出版している。

それを可能にしたのは、大デュマには共作者、共同執筆者、助手が、それも多数いたからだ。

### デュマ小説会社

曾孟樸は、大デュマの共作者たちについてどのように記述しているのか。私は、興味深く思う。

デュマに最も深くかかわったのは、マケ<sup>ママ</sup> Maguet である。「三銃士」「モンテ・クリスト伯」の2書については重きをなしており、マケの力が非常に大きかったという。しかし、デュマはこのような方法は時間をムダにするものでとても不都合だと考えた。そこで手っ取り早い方法を思いつく。つまり、若い敏速な作家を募集し、彼らに題目をあたえる。あるいは模範を示す。原稿ができればそれを返すが、それには自分の名前を署名する。はじめは優劣を選別していたが、つづけるうちに善し悪しを問わなくなり、すべて拒むことはなかった。遊記にしる、批評にしる、小説にしる、まとまりもなく採用して少しばかり手を加え、自分の名前をつけて出版したのだ。

見てのとおり、曾孟樸は大デュマのやり方を非難するわけではない。そういう事実があると説明しているだけだ。注目しておきたい。曾孟樸は、大デュマが他人の作品を盗作してけしからん、と書いているわけではない。

しかし、当時のパリには、大デュマの作品はすべて盗作だ、と批判する人もいた。アンドレ・モーロワ著、菊池映二訳『アレクサンドル・デュマ』(筑摩書房1971.10.5.169頁)によると、『小説工場、アレクサンドル・デュマ会社』という本が出版されたという。共作者を使ったといって大デュマを非難した。

真の作者だという人の名前を暴露したのが下の一覧表だ。記号「/」の後ろに示

した漢字とフランス語の表記は、沈徳鴻（茅盾）が「大仲馬評伝」\*6のなかであげた名前だ。

オーギュスト・マケ / 馬格 Auguste Maquet  
フェリシアン・マルフィーユ / 麦勒菲 J. P. Mallefille  
ポール・ムリス  
オーギュスト・ヴァクリー  
ジェラルド・ド・ネルヴァル  
アンリ・エスキロス  
アドルフ・ド・ルーヴァン  
アニセ・ブルジョワ  
ガイヤルデ  
テオフィル・ゴーチエ  
/ 臘柯滑司 Paul Lacroix  
/ 包卡琪 Paul Bocage  
/ 飛哇倫蒂 P. A. Fiorentino

末尾の3名は茅盾の文章にあがっている。アンドレ・モーロワが言及していない名前まで茅盾は把握していることになる。茅盾が利用した英文資料に名前があるのだろう。

大デュマに協力した人々の多さを見るにつけ、林紘の共訳者たちを自然に思い浮かべる。林紘は「翻訳工房」であり、大デュマが「小説工場」「小説会社」なのだ。人物は異なり場所も時代も違う。だが、ふたりの採用した方法が、よくにている。林紘は協力者の口述翻訳を筆記するという翻訳であり、大デュマは他人の原稿に修正をほどこす創作なのだ。

異なるといえば、大デュマは自分の名前だけを前面に押し出し（出版社側の要望があった）、林紘は必ず共訳者との連名にしたことくらいだ。

茅盾は、デュマ小説工場をどのように説明しているのか。引用してみる。

大デュマの著作はすべてが彼自身の手になるというわけではない、と多くの批評家が疑っている。大デュマと署名した作品は、実際のところすくなくとも

大半は彼の「秘書 [漢語も同じ]」 合作者の書いたものであり、大デュマの名前を用いたにすぎないと考え、ゆえに大デュマは「盗用 [掠美]」したという。彼らが疑う理由は、ひとつに大デュマには多くの助手がいたことだ。最も著名なのはマケ (Auguste Maquet)、ラクロワ (Paul Lacroix)、マルフィーユ (J. P. Mallefille)、フィアレンティーノ (P. A. Fiorentino) などである。これは事実だった。ふたつに、大デュマの全集は300巻にものぼり、戯曲の25巻、遊記、『回憶録』、雑文など約20巻を除いても、小説だけで250巻前後がある。それぞれは、すべて300ページくらいもあり、小さい活字ですきまなく印刷されている。しかも大デュマが小説を書いた時期は10年にすぎず、その10年のなかで遊覧やら娯楽やらで3分の1が占められる。ゆえに大デュマが著作した時間は、実のところ67年だけで、この時間に250巻の書物を完成するのは、考えてみればひとりの力量ではできそうもない。17-18頁

合作者による原稿が、すでにあった。短期間に膨大な作品を書いている。このふたつの理由から、当時の批評家は大デュマが盗作したと疑った。だから、小説工場、小説会社と批判され、裁判沙汰にもなった。創作はひとりの人物が独創的に行なうものである、と考える人から見れば、大デュマの仕事は盗用盗作になるだろう。しかし、もとのつまらない原稿が、大デュマによる修正を得てすばらしい作品に生まれ変わったのだ、という見方が当時からあったのも事実だ。新聞社にしても、大デュマの名前をはずすわけにはいかない。大デュマの名前を冠した小説だからこそ販路拡大の材料になる。

矛盾は、そこをどのように解釈したか。小説工場に賛成するのか反対なのか。

大デュマの著書には助手がかならずいて疑わしいとしても、しかし、事実が私たちに証明してくれている。つまり、大デュマの助手は資料収集と整理を手伝う「書記」にすぎず、代筆しているわけではないのだ。18頁

矛盾は、短時間に大量の原稿を書いたスコット、ダヌンツィオの例をあげる。彼は、最初から大デュマを弁護するつもりで文章を書いているとわかる。大デュマの助手は、資料収集と整理を手伝っただけの秘書書記だと証拠もないのに決めつけているのだ。

資料を整理しただけの助手もいた可能性は、当然ある。だが、自分の原稿を公表して盗用されたと裁判に訴える人物が存在したことについては、茅盾は説明していない。大量の作品を書くことができたのは、大デュマが不世出の天才だからだ。茅盾はこう述べるにとどまっている。茅盾の見解によれば、小説工場という呼び方はできそうにない。なにしろ大デュマは天才なのだから。そうなると資料を整理しただけの助手の名前が、あれだけ多く記録として残っているのはなぜなのか、説明できないではないか。茅盾の記述は、大デュマを弁護するのに一生懸命で、矛盾が生じていると私には見える。

私が大デュマの小説工場に興味をいだくのは、どうしても林紘の翻訳工房を連想するからだ。大デュマはよくて、林紘はダメなのか。

その茅盾が、林訳について簡単に触れている短文がある。紹介しておこう。

署名「明」を使って公表した「直訳 順訳 歪訳」(『文学』第2巻第3号1934.3.1。366頁)である。

「直訳」というこの名詞は、「五四」以後にようやく権威となった。これは林琴南氏の「歪訳」に反抗してはじまったものだ。林訳は「歪訳」だ、と私たちはいうが、彼を侮辱する考えは少しもない。「意識」という名詞を林訳に使用するのは決して妥当ではないと私たちは感じる。だからそれを「歪訳」と称する。／林氏は「蟹の横ばい文字」を理解しなかったから彼のすべての訳本は別人が口述翻訳し林氏が筆述した。私たちは、当時彼らが協力した状況についてそれほどわかっていない。別人がまず一文を口述翻訳し、林氏もそれに従って一文を筆述するのか、それとも別人がまず一段一節を口述翻訳し、その後林氏が筆述するのか。しかし、どのようであれこの種の翻訳法は、二重の歪曲を免れることはできない。口述翻訳者が原文を口語に翻訳するところどころの歪曲が生じるのを免れないし、さらに林氏が口語を文言に訳すのだから、これは2度目の歪曲になる。

茅盾は、「彼(林紘)を侮辱する考えは少しもない」と書きながらその翻訳が「歪訳」だと指摘する。歪曲というのだから決してほめてはいない。しかも、林紘の「歪訳」に反対して「直訳」が出てきたと説明する。

ただし、茅盾は林訳の評価すべき点にも言及した。つまり、原文の風趣をいくら

かはすくい上げた例として『拊掌録』(Washington Irving “ THE SKETCH BOOK OF GEOFFREY CRAYON,GENT. ” )なかのいくつかがあるというのだ。

茅盾は、書名をあげるだけでこれ以上詳しいことは説明していない。元になる文章があるのだが、なぜかしらそれに触れない。もとの文章とは、胡適「五十年來中国之文学」(『最近之五十年』上海・申報社1923.2)である。胡適は、アーヴィングともうひとつディケンズ Charles Dickens 『滑稽外史 NICHOLAS NICKLEBY』を例に引く。「彼は原書のユーモラス[詼諧]な風趣についてしばしば深く理解していたから、彼はその種の箇所について更に力を用いそれだけ精彩を放った」(6頁)

見るべき箇所はあるにしても、茅盾にいわせれば、結局のところ林紘は「歪訳」したのだ。林訳についての評価は、まことに低いといわざるをえない。

だが、私は考える。当時の大デュマ小説工場に理解を示すのであれば、林紘翻訳工房について同様の態度を表わす人がいてもいいのではないか。素朴にそう思う。

一方は小説であり他方は翻訳という違いはある。フランスという外国だし、また時期も中国の林紘とは異なる、というかもしれない。だが、林紘が外国語を理解せず、共訳者がいたというだけで林訳がおとしめられているのを見るにつけ、大デュマのことを思い浮かべる。評価の不公平さを考えずにはいられない。中国の研究者は、フランス人の大デュマなら許すが、自国の林紘は許さないらしい。

曾孟樸の「大デュマ伝」は、息子の小デュマに言及する。当然ながら彼の小説『椿姫[茶花女]』を出している。林紘が『巴黎茶花女遺事』と題して翻訳刊行した。それが中国で大いに歓迎されたことを知らない人はいない。しかし、曾孟樸はわざと林紘の名前に触れない。1907年という時点で、孟樸は林紘を無視したのである。

以上の仕事、論文「大デュマ伝」の執筆を含んだ活動は、曾孟樸が林紘に会う前だろうと私は推測する。

曾孟樸の回想に見られる林紘訪問は、何年のことか明記されていない。林紘の側から考えてみよう。

### 林紘から見た曾孟樸

林紘が、同時代人の創作作品についてどのような感想を抱いていたのか。書かれたものは多くはないし詳細でもない。彼の翻訳に掲げられた「序」がかりうじて参考になるだけだ。

たとえば、(英)ハ葛徳 Haggard 著、林紓、魏易訳『(言情小説)紅礁画槳録』上下2巻(上海・商務印書館1906年四月/1913.12三版 説部叢書初集第45編。“BEATRICE”1890)だ。

その「訳餘剩語」には、「孽海花」を読んで絶妙だと感嘆している。

私が注目するのは、「発起編述二君子」は誰か知らない、と林紓が書いている点だ。二君子とは、原著に「愛自由者発起、東亜病夫編述」と記されていることを指す。筆名が使用されている。それぞれ金松岑と曾孟樸だが、その時、林紓は知るべきがなかった。

林紓は、同じくすばらしい作品として「文明小史」と「官場現形記」をあげる。それらの著者は南亭(あるいは南亭亭長)であり、こちらも筆名だ。今だからこそ李伯元だと知られている(話がややこしくなるので、欧陽鉅源については今は触れない)。

著者が李伯元であると公表されたのは、彼の死後だ。李伯元の友人呉趼人が短い文章を発表した。呉沃堯「李伯元小伝」(『月月小説』第1年第3号1906.12.30)である。「李伯元小伝」が公表されたのは、『紅礁画槳録』の刊行後だ。林紓は、その小伝によって李伯元についての情報を得たらしい。

そう考えるのは、(英)卻而司迭更司 Charles Dickens 著、林紓、魏易訳『(社会小説)賊史』上下2巻(上海・商務印書館 戊申六月初三日(1908.7.1)/1915.10.19再版 説部叢書2集第15編。“OLIVER TWIST”1838)があるからだ。

「序」には、「李伯元はすでに亡い。今日、健やかなのはただ孟樸と老残のふたりだけだ」と見える。

李伯元は死去した、と書いている。呉趼人の文章が公表されたあとだ。老残とは、「老残遊記」の作者劉鉄雲を指す。だが、1908年時点で林紓は劉鉄雲のことを知らない。では、曾孟樸の名前が出てくるのはなぜか。

曾孟樸は北京の林紓を訪問したことがある、と述べた。その時、曾孟樸自らが、林紓にそう告げたのではないか。「孽海花」の著者について本名が不明だったのは、1906年だ。1908年には曾孟樸だと指摘している。林紓と孟樸の面会が1907年であれば、話がつながる。

ここでふたたび曾孟樸の回想に目を向けよう。

#### 曾孟樸の林紓訪問

林紓が漢訳スコットを刊行しはじめた。曾孟樸は、期待をもって見守った。

1905年以降のことだ。ただし、孟樸から見れば翻訳するにあたいしない作品も一生懸命に出している。そこで北京に行ったときわざわざ林紘を訪問した。上述の理由で、それは1907年のことだったと考える。曾孟樸は、林紘に会ってなにを話したのか。何を知ったのか。

あるとき、私は北京に行くときわざわざ彼をたずねていき、しばらく話しました。そこでわかったのは畏廬（林紘）氏は中国の文豪ではあるが、外国語はまったく理解せず、外国文学の起源と発展についてはさらに無知であるということでした。翻訳はほかの人が口述するのに全面的に頼っており、選択の権利も他人の手にあったのです。

かなり有名な文章だといえよう。よく引用される箇所だ。林紘が外国語を知らない、作品選択の主導権は共訳者が持っていた。以後、多くの研究者がそう書いて林紘批判の理由にする。

しかし、曾孟樸の回想が公表されたのが1928年だということを考慮する必要がある。中国では1919年の五四事件をへたのち、1924年の林紘死去を契機にして林紘批判はその度合いを強めている。孟樸が上の書簡を書いたとき、林紘批判が基調としてすでに存在しているのだ。その影響を曾孟樸は受けていると考えていいだろう。しかも、手紙の相手は胡適である。林紘批判を実行した文学革命側のひとりだった。

例をあげよう。

曾孟樸は、林紘に会って始めて彼が外国語を理解しないことを知ったように書いている。これは、奇妙である。なぜならば、スコット『アイヴァンホー [撒克遜劫後英雄略]』の林序に「私は外国語がわかりません [紘不通西文]」とはっきり書かれているからだ。曾孟樸が目にしたのは林訳スコットにほかならない。これが1905年のこと。曾孟樸が林紘と話をするのが1907年だ。ゆえに、孟樸は林紘に会う前から彼の外国語については知っていたはずだ。

ほぼ20年前のことを回想しているから、細部が不鮮明になっているというのだろうか。

では、作品選択は共訳者まかせ、という表現はどうか。前の部分に「彼には基準がない」と書いていた。大衆小説が多く含まれていることを批判したのだ。これと

のつながりで作品選択うんぬん、ということになったものだろう。だが、これもおかしいことだ。数点の翻訳しかないならば、選択をする機会が生じるかもしれない。だが、林紘はその生涯に200件をこえる翻訳を送り出している。世界の主要作品を多く含んでいるのが事実だ。

曾孟樸自身もその点は認めている。「彼（林紘）が一生に訳した小説は、200余种を下りませんでした。世界の偉大な名著は彼によって訳出されそれも少数ではありません。翻訳界に豊富な貢献をしたということが出来ます」

しかし、孟樸はそれにどうしてもひとつつけ加えたかった。「価値のないものを除去し、重複して翻訳されているのを減らし、それぞれの大家の代表的作品を補充することができれば、彼（林紘）が意識しすぎ、忠実ではないのを勘定に入れたとしても、現在の成績に比べればはるかに申し分のないことなのです」

曾孟樸の回想には、過去と現在の感想が混在している。ただ、孟樸が考える正統で系統的な翻訳小説には、大衆作家の作品は含まれていない。これは、一貫して変化がない。

曾孟樸は、林紘にむかって直接的に言ったのか。

私は彼（林紘）の好意をうけ、彼は私の作品（「孽海花」）を極力賞賛しましたから、私の方も熱心に彼を手助けするつもりで、ヨーロッパ文学の全体と流派についてそのおおよそを彼に幾度か話しました。さらに彼につきのように告げたのです。もし今のままにやり続ければ、その量は十分であるにしても、唐宋小説にならった外国の材料を若干ふやすにすぎず、中国文学の前途にとってはなんの影響も生みません。私たちが翻訳をする主旨は、私たちの文学の古い領域を拡大することであって、私たち個人の文章を見せびらかすためではないのです、と。

「彼に幾度か話しました〔和他談過幾次〕」とある。曾孟樸が林紘を訪問したのは1回限りではなかったことがわかる。たしかに、ヨーロッパ文学全体について説明したというのだから、短時間で終えるのは無理だろう。

1907年といえば、孟樸は三十六歳、林紘は五十六歳だ。親子ほどの年齢差がある。ちなみに、二十歳の年齢差は、曾孟樸と息子虚白の年齢差二十二歳とさほど変わらない。林紘から見れば息子くらいの青年につきあってその意見に耳を傾けた。

丁寧なことだと私は思う。孟樸が「孽海花」の著者であるのが大きな理由であろう。

曾孟樸が展開したのは、彼の持論である外国文学の系統的な翻訳紹介であった。その中のひとつが大デュマの「王妃マルゴ」というわけだ。一見して孟樸の意見は正統であり正当なように思われる。

だが、ここには読者側からの視線が抜け落ちている。こうあるべきだ、と供給する側の論理で一貫しており、受け取る側がなにを欲しているのか、孟樸の思考にはそれがない。小説林社から翻訳刊行した主力は探偵小説であった事実を知っているはずなのだ。知っていたからこそ、むしろ意地になって正統文学を強調したかったのかもしれない。

林紓と曾孟樸では、意見の一致を見ることは最初から無理だった。

曾孟樸は、林紓にむけて提案をふたつ行なった。

ひとつは、白話を使用することです。ひろく理解してもらうことを希望しているのは当然として、原作者の作風を保存し、外国文学の真面目、本当の精神を人に認識させることができます。ふたつに、翻訳の基準を設定すべきです。各時代、各国、各派の重要名作を選び、順序を追って翻訳しなければなりません。

翻訳するには、白話を使用し、系統だった名作だけを選択する。これが曾孟樸の提案だった。つまり、このふたつとも林紓は実践していないという指摘になる。

大胆といえば、これほど大胆な提案もない。なぜなら、若者が老人に面と向かって、あなたのやっていることはでたらめです、と直言しているのと変わらないからだ。孟樸自身、「私のことばは、当然あの人の気にさわったはずですよ」と書いている。わかっていてわざと林紓を挑発したということができる。

これに対して林紓は、どういう態度をとったか。

そこまで理解しているのであれば、自分がやったらどうか、と怒鳴りつけ「お客様はお帰りになるぞ」と呼ばわり面会を即座にうち切っても不思議ではない状況だ。だが、林紓は忍耐強い。孟樸の相手をして丁寧に答えている。

彼（林紓）は第1点について、完全に反対しました。得意とするところを犠牲にして「孽海花」の後塵を拝するのは望まないというのです。第2点は、事

実としてできない。自分は外国語を理解しないため、選択し予定する方法がなく、他人が選択するのだから、現在と同じこと。他人が名作をもってくるのを共訳するのだから、先に目録を作る必要もないし、そうすればかえって拘束されてしまう、と。

古文家である林紘は、曾孟樸が提案する白話使用を拒否した。林紘にすれば当然だ。彼が長年親しんできた文言を捨てることなど考えもしなかった。林訳を読むのは、知識人だという前提が当然ながら存在する。だからといって、林紘は白話に反対したわけではない。ご注意いただきたい。林紘は白話に反対したと攻撃したのは、文学革命派の主張にすぎない。捏造なのである。

作品選択については、林紘は共訳者を信頼していた。そう考えていいだろう。林紘ほどに学識豊かで経験があれば、共訳者が口述する内容について独自の判断をくだすことができる。だからこそ知識人と呼ばれる。曾孟樸が林訳に注目したきっかけを思い出してほしい。スコット作品であった。孟樸という読者を引きつける翻訳作品になっていたということにほかならない。

曾孟樸が白話の使用を勧める理由のひとつは、読者の理解を得ることができるからだ。もうひとつは、「原作者の作風を保存し、外国文学の真面目、本当の精神を人に認識させることができます」となる。この箇所を見ると、曾孟樸が原文に忠実な翻訳を心がけている、と誰でもが考える。おなじ文章の前の箇所「彼（林紘）が意識しすぎ、忠実ではない」とわざわざ書いている。林訳について「忠実ではない」と批判するからには、曾孟樸自身は原文を忠実に漢訳しているはずだ。

林紘が望んでもなしえなかった外国文学の逐語訳、あるいは直訳を孟樸は実践している。そう受け取るのが当然だし自然だろう。

以上のように考えるのは、私だけではない。時萌がいる。

「翻訳の言語については、曾樸は直訳を主張した。しかし、まるごとそのままというのには賛成ではなく、原著に忠実でしかもわかりやすい直訳に賛成した。意識には反対で、清代以来かつて流行した、気ままに原著を書きあらためる「訳述」はことのほか嫌った。なぜなら彼も一度はその道を歩いたことがあり、その弊害を深く知っていたからだ」\*7

「訳述」とは、日本語でいう「翻案」である（書くまでもないことながら漢語の「翻案」とは意味が違う。漢語のほうは、判決、評価などをくつがえすこと）。曾孟樸の回

想文を読めば、時萌が示した理解は正しい。翻訳は直訳しなければならない、と曾孟樸は考えていた。

郭延礼も同様である。

「翻訳は原著に忠実でなくてはならない、と曾樸は主張し、林紘式の翻訳と意識には満足していなかった。翻訳者は原著の言語の文法と特色をまじめに研究しなければならず、そうしてようやく原著の風格を忠実に伝えることができる、と彼は考えた」\*8

「曾樸はフランス語に精通していたから翻訳もまた厳密で、訳す本を選択することから文字の表現にも時間と精力をかたむけた。それにより彼の翻訳はかなり原著に忠実であり、彼の翻訳したフランス文学作品は、本世紀初期の翻訳のなかではよい訳本なのである」\*9

郭延礼が高く評価する曾孟樸の翻訳は、本世紀初期のものだ。まさに本稿で主題とする「王妃マルゴ」に違いない。フランス語原文に忠実な翻訳になっていると郭延礼は保証する。

では、検証することにしよう。曾孟樸の主張は実践されているのか。翻訳を見ればおのずと判明するだろう。

#### 曾孟樸訳「王妃マルゴ」

以前、私は簡単に紹介したことがある。樽本「曾孟樸訳「マルゴ王妃」」(『清末小説研究会通信』第25号1983.2.1。『清末小説きまぐれ通信』1986.8.1所収。『樽本照雄著作目録1』2003.1.1所収)だ。

昔の文章であることにいまさらながら驚く。何度も使うのは気がひける。だが、広く流通したものではない。また、転写したときに抜け落ちた部分があることが気になっていた。欠落を補い誤植を正して引用する。

25) 第25号 1983.2.1 曾孟樸訳「マルゴ王妃」 19830201

曾孟樸が雑誌『小説林』に発表した作品は、そう多くない。小説としては、単行本で出版した『孽海花』の続編第21-25回(第1、2、4期1907.正、二、六)のみである。あとは「大デュマ伝」(第5期1907.七)、翻訳「馬哥王后佚史」(第11、12期1908.五、九)および旧詩が少々といったところだ。

「大デュマ伝」に附された「大デュマ著作目録」は曾孟樸の作であるが、そ

れによると「馬哥王后佚史」は「馬高王后」の書名で次のように紹介されている。「La reine margot 『マルゴ王妃』三巻、シャルル王の八月十四日<sup>マ</sup>聖バルテルミーの教徒虐殺(1573<sup>マ</sup>年)およびヴァロア王朝の陰謀を描く。すべて15世紀の時事である(後略)」。聖バルテルミーの虐殺は1572年8月24日パリに引き起こされた事件で、カルヴァン主義の新教徒(ユグノー)と旧教徒の政治的対立を背景としている。マルゴ王妃とは、ユグノー派の総帥アンリ・ド・ナヴァール(後のアンリ四世)と結婚したマルグリット・ド・フランスのことだ。曾孟樸の翻訳は、雑誌が停刊したためか第2章の半ばで中断している。

「マルゴ王妃(孟樸の訳名は馬哥王后佚史)」が大デュマの作品であるのは明らかな事実なのだ。が、李培徳著・陳孟堅訳『曾孟樸的文学旅程』(台湾・伝記文学出版社1977.8.1. 53頁)では書名を「瑪麗王后日記」とし、附録の書目ではユゴー作と誤っている。また、時萌も『曾樸研究』(上海古籍出版社1982.8. 29頁)でユゴー作とするが、正しくない。曾孟樸にはユゴー作品の翻訳が多いところからくる誤解か。なお、該書の全訳が出ている(郝運、朱角、陳樂共訳『瑪戈王后』上海訳文出版社1982.9)

〔前注〕なにか役に立つのではないかと、桐生操『王妃マルグリット・ド・ヴァロア』(新書館1983.2.10)を買って「つん読」いてあるのだが……(96頁)

ひとつだけ補足説明する。「ユグノー huguenot」とは、新教徒をさしてカトリック側が使用した蔑称である。

私がこの短文を書いたとき、曾孟樸の訳文そのものを検討しかけていた。そのまま中断したのを引っぱり出して今やろうというのだ。時間はかかったが、私の奥底で興味が持続していたとご理解いただきたい。

あらためて曾孟樸の訳題をかかげよう。

(法)大仲馬著、東亜病夫(曾孟樸)訳述「(大仲馬叢書第一種)馬哥王后佚史」2節(『小説林』第11-12期 戊申(1908)年五月-九月。Alexandre Dumas père “LA REINE MARGOT”)である。

「大デュマ叢書」と銘打っている。それを見れば、ほかの作品も継続して翻訳する計画でもあったらしい。しかし、それは実現しなかった。この「王妃マルゴ」も最初部分だけを発表してそのまま中止だ。掲載した『小説林』雑誌が停刊したからしかたがない\*10。

掲載誌の目次には「歴史小説」の項目にかかげてある。たしかにフランスの歴史小説だ。

出だしの部分を引用する。教会の鐘が夜9時を知らせる箇所までだ。

### 第一節 婚讌

敬告看官們。現在這部法蘭西絕大的哀史。要開場了。你們知道他開場是什麼時代呢。就在耶穌降生後一千五百七十二年八月十八日禮拜一。開場時候講的是件什麼故事呢。就是法國王家揀着這一天好日子在羅仏宮裏舉行一個百年難逢的盛會。且說這羅仏宮原是法國一座古王宮。在聖善曼禮拜堂的對面。菩羅朋王邸第的斜對面。本來世界有名的大建築。不要說傑閣三層。文窗百面。二[一]片華煥的光彩。耀得人眼花。就看那幾百根鬼斧神工的圓柱。那一根不是瀟月鑄雲。攢金簇翠。做得過來雕刻師的模範呢。但是這古王宮。雖然巍奩。到底禁地森嚴。往常一到夜間。望著樓窗上總是黑魘魘地。不透一點燈光。就是近著王宮的幾處地方。幾條街道。也只是靜悄悄。輕易找不到人影兒。却不道到了禮拜一那一晚。看看時光將近半夜。聖善曼禮拜堂的報時鐘。鏗鏘的打了九下。只見羅仏宮裏還是一片燈燭光。照耀得天都紅了一半。1頁

### 第1節 結婚の宴

さてみなさま、ただいまよりフランス絶大の哀史のはじまりはじまり。みなさま方、幕開けはいつの時代かご存じか。キリスト生誕後の1572年8月18日の月曜日であります。幕開けにお話しするのはどのような物語でありましょう。すなわちフランス国王家がこのよき日を選びルーヴル宮で百年に1度あるかないかという盛會を舉行する。さて、このルーヴル宮は、もとはフランスの旧王宮であり、サン=ジェルマン聖堂の向かい、ブルボン王邸宅の斜め向かいにある。本来は世界的に有名な大建築で、すばらしい建物であることはいうにおよばず、多くの飾り窓、輝く光のあやで目もくらむほど。神わざのような精巧きわまるあの数百の円柱を見れば、月雲を彫り込み、金翠をちりばめないものはなく、後の彫刻師の模範となっている。しかし、この旧王宮は、美しく高くそびえ立つとはいえ、結局のところ立入禁止の場所でいかめしく、通常は夜になれば建物の窓をながめても暗くひっそりとして、すこしの灯火ももれてはこない。王宮近くのいくつかの場所、いくつかの通りも、ただ静まり返っているだけで人影をさがすことは簡単ではない。思いもかけず月曜日のその夜は、夜中

になりかかり、サン=ジェルマン聖堂の鐘がゴンゴンと9回鳴ったにもかかわらず、ルーヴル宮のなかは一面のあかりで、空の半分を赤く照らし出すほどであった。

出だしを見ただけでなにやら奇妙な翻訳だと感じる。これが大デュマの作品なのだろうか。原作に忠実な漢訳、つまり直訳であるのか。原文にはそう書かれているのか。

読者に呼びかけてはじまるのは、中国の旧小説、すなわち回数を分けて記述する長編の章回小説でおなじみの書き方だ。大デュマが、小説のなかでまったく読者には呼びかけない、というわけではない。だが、冒頭からそれはない。曾孟樸の漢訳に相当する箇所を原文と訳文で示す。

#### LE LATIN DE M. DE GUISE.

Le lundi, dix-huitième jour du mois d'août 1572, il y avait grande fête au Louvre. Les fenêtres de la vieille demeure royale, ordinairement si sombres, étaient ardemment éclairées; les places et les rues attenantes, habituellement si solitaires dès que neuf heures sonnaient à Saint-Germain-l'Auxerrois, étaient, quoiqu'il fût minuit, encombrées de populaire. p.1\*<sup>11</sup>

#### 1 ギーズ殿のラテン語

一五七二年八月十八日、月曜日、パリのルーヴル宮では盛大な祝宴が催されていた。

旧王宮の窓という窓は、ふだんはあれほど暗いのに、今日ばかりは煌々と明るかった。隣接する広場や街も、日ごろはあれほどもの寂しいのに、今宵は、サン=ジェルマン=ローセロワ聖堂の鐘が九時を告げると、時は深更にもかかわらず、町民たちの群で満ち溢れていた。12頁\*<sup>12</sup>

両者を見れば、まず章題が違う。

曾孟樸が「婚礼の宴」と書き換えたのは、そのほうが内容にふさわしいという判断だろう。しかし、原作の「ギーズ殿のラテン語」は、わざと謎めかせて秘密の間関係を説明している。具体的であり、しかも象徴的な表現である。マルゴが新婚の夜、愛人と会う約束をする。ラテン語を使用したのは、周囲の人々に気づかれな

いようにするためだ。そこから章題に使われた。複雑な宮廷の状況を読者の前に展開する重要な語句だ。それを曾孟樸が無視しているのは、やや意外である。

大デュマの原作は、年月日とルーヴル宮をとりまく情景描写があるにすぎない。ところが、曾孟樸訳では9時の鐘がなるまでに、ルーヴル宮について原作には存在しないこまかい説明を加筆している。そういう勝手なことをしていいのか。

曾孟樸の主張は、白話を使用すること、および原作に忠実な翻訳だった。中国の研究者も、それを認めている。郭延礼は曾孟樸の翻訳を実際に検討したのだろう、それが正しいように書いていた。

上の漢訳はどうか。

たしかに白話を使用している。それは間違いない。だが、目の前の漢訳を見ると、なんだろうかと私は思う。くり返さずにはいられない。これが原文に忠実な翻訳だろうか。曾孟樸は、原作にない説明文を加筆している。これでは原作に忠実な漢訳だということはできない。誰が見ても明らかだろう。後の研究者は、それを無視して曾孟樸の翻訳を賞賛する。奇妙なことだ。

林訳については、意識の代表だと説明される。誤訳省略が多い、随意に加筆をするなどなど、指摘しない人はいないくらいだ。矛盾は、なんと「歪訳」とまで表現して林訳を罵っているではないか。

評判が悪いから、あらかじめ先入観をもって林紘の訳文を見てしまう。ところが、事実はどうか。原文と林訳を実際に比較対照し検討すれば、筋を大きくはずれる省略、加筆などが言われるほどあるわけではない。林訳は、一般に存在している予想、予断を裏切る。林紘の意識を根拠にして批判する研究者は、その多くが実物を見ていないのではないかと疑う。まさかと思う。あるいは林紘が省略した箇所だけに注目し、それを研究者は強調しているのかもしれない。

ならば、世界に知れ渡っているシェイクスピア、イプセンの戯曲を小説にして漢訳したというあの定説はどうだったか。現在まで研究者のほとんど全員が信じ込んでいる例の「戯曲と小説の区別がつかない」論だ。調べてみれば、とんでもない言いがかりだった。戯曲を小説に書き換えたクイラー=クーチとデルの英文原作を林紘らは選択し底本としたにすぎない。林紘冤罪事件のひとつなのである。

林訳に関するこれら負の評価は、原作と比較対照すれば修正せざるをえなくなる。その落差を痛感するはずだ。

一方の、原文に忠実な翻訳だと研究者が太鼓判をおす曾孟樸訳が、上の冒頭を見

ただでこのありさまだ。フランス語原作を逐語訳的に翻訳してはいない。いわれているような忠実な翻訳ではない。これは、一体どういうことなのか。孟樸訳も林訳と同じく評判を裏切る。ただし、負の方向に、だ。

冒頭部分だけが原文とは異なった漢訳になったのかもしれない。もう少し見てみよう。

この日、王廷で行なわれたのは、シャルル9世の妹マルゴ(マルグリット・ド・ヴァロア)とナヴァール王アンリ・ド・ブルボンの婚儀である。大デユマは、そのにぎやかな様子を描写して不気味な予言をすべりこませている。

Il y avait, malgré la fête royale, et même peut-être à cause de la fête royale, quelque chose de menaçant dans ce peuple; car il ne se doutait pas que cette solennité, à laquelle il assis tait comme spectateur, n'était que le prélude d'une autre remise à huitaine, et à laquelle il serait convié et s'ébattrait de tout son coeur. p.1

王家の祝宴であるにもかかわらず、いや、おそらく王家の祝宴であるがゆえに、これら民衆のうちには何やら険悪な気配が漲っていた。これら民衆は、今、自分たちが見物人として見守っている王家の盛儀が、一週間後に予定されたもう一つの盛儀の序曲に過ぎず、その週になれば、自分らも招かれて有頂天になって騒ぎまわるはずであることに、少しも気づいていなかったからである。

13-14頁

祝宴だからめでたく華やかだ。しかし、表面のにぎやかさの奥底に険悪な気配がひそんでいる。「一週間後に予定されたもう一つの盛儀」とは、聖バルテルミーの虐殺をさす。カトリック派(以後、旧教と称する)がプロテスタント派(以後、新教)を襲撃し大量虐殺する事件だ。その虐殺に民衆自身が参加して「有頂天になって騒ぎまわるはず」と前もって説明するところが恐ろしい。

以下は、その箇所を漢訳した曾孟樸の文章だ。

一般説也奇怪。法国節日一年中總要举行幾次。当着举行的時候。百姓們不但不高興來湊趣。倒常常有点兇怕。只有這回却是坦坦蕩蕩。人人心中鼓舞歡欣得了不得。來到羅伯宮前。好像去到大戲園裏看戲的一般。只等一齣新鮮戲文上場。

大家都想開開眼兒的樣子。你道這齣新鮮戲文是什麼呢。原来就是法国朝廷举行一件歷史上有名的大婚礼。2頁

普通にいっても奇妙だが、フランスでは祭日は1年に幾度か行なわれ、そのとき民衆は楽しみ面白がるわけではなく、その逆でいつもすこしばかり恐れる。ただ、今回はとてものびのびしていて、人々は心のなかで手に負えないくらい興奮しよるこんでいた。ルーヴル宮の前になると、まるで劇場に行つて芝居を見物するかのようだ。ただ新しい劇が上演されるのを待つて、皆は珍しいものを見ようとする。あなたは、この目新しい劇はなにかといわれるか。なんと、フランス朝廷が歴史上有名な大婚礼を挙げるのである。

大デュマは、1週間後に引き起こされる大虐殺を予告した。曾孟樸は、原文を無視して漢訳しない。民衆の心理状態を説明して原作とは反対の意味に訳している。これでは大デュマのフランス語原文に忠実であるということとはできない。

「王妃マルゴ」は、旧教と新教の宗教戦争、およびそれに関連する政治的対立を背景にしている。宮廷に登場する人物の複雑で複数の恋愛をからめた歴史小説だ。

曾孟樸は、宗教的対立を中国の読者にどのように説明するのか。あるいは、しないのか。単語をとりあげてみる。漢訳に日本語をそえる。

加維尼新教(3、5頁) = カルヴァン新教

月格奴(割注:当時旧教呼新教之名)(5頁) = ユグノー(当時、旧教が新教を呼んだ名称)

加特力旧教(3、6頁) = カトリック旧教

説明はない。これだけ。簡潔といえそうなる。当時の辞書を見れば、旧教には「信天主教人」と、新教には「背天主教者、改正教人」と漢訳をつけている(「耶蘇教」を当てるのは時代が異なるらしい)。ルーヴル宮を説明して加筆するなら、同様にキリスト教についても解説があってもいいように思う。それは、ない。せいぜいが「ユグノー」どまりだった。

シャルル9世(マルゴの兄)は、旧教である。彼が不可解なのは、新教のコリニエ提督を信頼し父とも呼んでいるからだ。

大デュマの原文から引用する。

C'était vis-à-vis de l'amiral de Coligny surtout, qui depuis cinq ou six ans faisait une guerre acharnée au roi, que la conduite de Charles paraissait inexplicable: après avoir mis sa tête à pris à cent cinquante mille écus d'or, le roi ne jurait plus que par lui, l'appelant son père e déclarant tout haut qu'il allait confier désormais à lui seul la conduite de la guerre; p.3

シャルル九世の言動が不可解に思われたのは、とりわけコリニー提督に対する場合であった。提督は、ここ数年来、国王に対して執拗な戦いをくり返していた。国王は、年来、提督の首に金貨十五万エキュの賞金を懸けていたが、そのくせ、提督を父と呼び、以後は戦いの指揮を提督一人の手に委ねることにすると揚言して、もはや提督なくしては夜も日も開けぬ有様であった。16頁

これが曾孟樸の手になると以下のような漢訳になる。

最犯他們疑的。就為有一回在福倫德戰爭時候。王独自在戰場上。忽然給一個五六年來反抗他最利害的高利尼將軍面對面的講話。那高利尼的頭顱。王已經懸過十五萬金鎊的賞格要購他的。如何轉背兒。倒私約着他。還尊稱他做垂父。6頁  
最も彼らに疑いを抱かせたのは、フランドル戦争のとき、この56年来王に最もひどく反抗していたコリニー將軍と、王は戰場にあって、ひとりで突然面と向かって話したからである。このコリニーの首には、王がすでに金15万ポンドの賞金を懸けていた。いかなることか一瞬のうちに、こっそりと彼に約束をし第2の父とも敬い呼んだ。

フランドル戦争は、原作ではその計画があると説明される。曾孟樸は、わざわざここに移動させ、あたかも戦争が行なわれたかのように記述する。意識のしすぎである。

また、ここにも「ポンド」が出てくる。「大デュマ伝」にでてきたのは「磅」だった。こちらは「鎊」だが、同じ意味だ。原文は「エキュ écus」だからなぜ置き換えるのが不可解である。意図的にポンドとしたのかもしれない。

細かいついでに、もうひとつ。マルゴの夫となったアンリ・ド・ナヴァールは19歳だが、孟樸は18歳とする(8頁)。

話題を転じるために原文には存在しない「それはさておき [ 閑話休道 ] 」(10頁)を挿入するのも章回小説風だ。

マルゴをルーヴル宮の宴会に導いて説明する場面を見よう。

Cette fiancée, c'était la fille de Henri , c'était la perle de la couronne de France, c'était Marguelite de Valois, que, dans sa familière tendresse pour elle , le roi Charles n'appelait jamais que *ma soeue Margot*. pp.6-7

この婚約者、これこそアンリ二世の娘、フランスの王冠の真珠と言われるマグルリット・ド・ヴァロワで、彼女のことを、シャルル九世は、親しみをこめた優しい気持ちから、<妹のマルゴ>としか呼んだことがなかった。21頁

シャルル9世の妹だから「妹のマルゴ *ma soeue Margot*」である。以下は、該当する個所の曾孟樸訳だ。

這位新嫁娘。就是亨利二世的女兒。人家都叫他做馬哥憐公主的。沙爾九世有時叫得親熱。順口就喚做馬哥<sup>ママ</sup>姉。10-11頁

この花嫁こそアンリ2世の娘で、人々は彼女のことをマルグリット王女と呼んだ。シャルル9世は時に親しみをこめて「姉<sup>ママ</sup>のマルゴ」と呼ぶのが習慣だった。

「フランスの王冠の真珠」に相当する漢訳がない。曾孟樸は、省略した。

「姉のマルゴ」は誤訳に見える。しかし、原文が「soeue」なのだから、それはありえない。そう考えるのが普通だ。私が思うに、ここは漢字の「妹」を誤植したのだろう。

招待客のお追従と当てこすりに対して、シャルル9世は答える。

En donnant ma soeue Margot à Henri de Navarre, je donne ma soeue à tous les protestants du royaume. p.7

「妹のマルゴをアンリ・ド・ナヴァールにあたえることによって、わたしは自らの心を王国の全新教徒にあたえるのである」22頁

マルゴとアンリ・ド・ナヴァールの結婚は政略的なものだ、と露骨に説明してみ

せる。

曾孟樸は、このセリフを省略した。そのかわりに、「シャルルはただ微笑んで、いちいちことば巧みに慰めた [ 沙爾只是微笑。一一把好言撫慰過了 ] 」(12頁)と漢訳してすませる。

人混みのなかで交わされるギーズ公とマルゴの会話だ。

*Ipse attuli.*

Ce qui voulait dire:

Je l'ai *apporté*, ou *apporté moi-même*.

Margurite rendit sa révérence au jeune duc, et, en se re levant, laissa tomber cette réponse:

*Noctu pro more.*

Ce qui signifiait:

*Cette nuit comme d'habitude.*

「イプセ・アチュリ」

これはラテン語で、『わたしはあれを持って来ました』あるいは『わたし自身を持って来ました』という意味である。

マグリットは若侯爵に礼を返して、身を起こしながら、こう答えた。

「ノクチュ・プロ・モレ」

つまり『今夜、いつものように』という意味である。23-24頁

ラテン語でかわされたこの会話が原文章題になったというわけ。

曾孟樸はそれを次のように翻訳した。

<sup>ママ</sup>J pse attuli. 馬哥半抬身回着礼。也答道。Noctu pro more. 這兩句話訳出来。瞿斯說的是「我拿来。我自己拿来」。馬哥答的是「今夜給往常一般」13頁

<sup>ママ</sup>J pse attuli. マルゴは身を半分おこして礼をかえしながら、Noctu pro more. と答えた。このふたつを翻訳すると、ギーズが言ったのは「私は持ってきます。私は自分で持ってきます」である。マルゴは答えたのは「今夜、いつものように」だった\*13。

ラテン語を用するところは原文のままだ。漢音で音訳して示すことも可能だろうが、孟樸はそうはしなかった。ここは、原文に忠実とすることができる。

ラテン語のままであろうと、音訳しても、どのみちその内容は翻訳するのだから意味はわかるようになっている。そうであるならば、いっそのことラテン語部分を省略することもできる。章題を「結婚の宴」と変更したのだから、ラテン語にこだわる必要はなかったのだ。別の側面からいえば、ここにラテン語原文を使うのであれば、章題もフランス語原文の「ギーズ殿のラテン語」にするほうがよい。

曾孟樸の翻訳方針は一貫していない、という印象を受ける。

孟樸が主張した、原文に忠実、直訳ということばが私の意識の底にある。これは否定することができない。本稿で何度も同じ単語を使用している理由でもある。だから、彼の漢訳を見ていると細かい違いが気になる。

マルゴの新郎アンリ・ド・ナヴァールには、ソーヴ男爵夫人という愛人がいた。マルゴの母カトリーヌ・ド・メディシス（つまり国王シャルル9世の母でもある）が放ったスパイだという。アンリ・ド・ナヴァールが、ガスコーニュなまりのフランス語でソーヴ夫人にむけて話すことばがある。部分のみを示す。

あなたはご自分が昼間はわたしの太陽であり夜はわたしの星であることを少しもご存じないのですか？本当に、わたしは自分がいとも深い闇の中にいると思っていました。そう思っていた折りも折り、先ほどあなたが現われて、とつぜんぱっと明るく照らしてくださったのですよ。27頁

「昼間はわたしの太陽であり夜はわたしの星 *mon soleil pendant le jour et mon étoile pendant la nuit*」という語句にご注目いただきたい。曾孟樸は次のように漢訳した。

你是我日裏的太陽。夜裏的月亮。我今兒一天只躲在黑地裏。直到你剛纔來了。我眼前纔豁然的光明了。

あなたは私の昼間の太陽で、夜の月です。私は今日いち日ただ闇のなかに隠れていました。あなたが先ほどやってくると、私の目の前がぱっと明るくなったのです。

星でも月でも違わない、小さいことを気にするな、という意見もあるだろう。だが、曾孟樸の翻訳方針は原文に忠実ということではなかったのか。星と月は異なる。孟樸は、原文の星をかえて月にしたかった。

アンリ・ド・ナヴァールは、ソーヴ夫人に今回の結婚についていいわけをする。

Non, non, ce n'est pas Henri de Navarre qui épouse Marguerite de Valois. p.11

いや、いや、ちがう。マルグリット・ド・ヴァロワと結婚したのはアンリ・ド・ナヴァールではないのです。28頁

その心は、「つまり改革派の宗教（新教を指す）がローマ教皇（旧教を指す）と結婚しただけの話さ c'est la religion réformée qui épouse le pape, voilà tout.」（同上）。政略結婚にすぎない、個人の愛情は問題にならない、という弁明である。曾孟樸は、そこをどうしたか。

今日那裏是南藩王亨利娶着馬哥憐公主。蘇菲夫人道。奇了。不是又是誰呢。亨利道。老寔說是新教嫁了教皇。17頁

本日、ナヴァール王アンリがマルグリット王女をどうして娶ったというのですか。ソーヴ夫人は、いう。奇妙なこと。違うのでしたらどなたですか。アンリは、いう。実をいうと新教が教皇に嫁いだのです。

「どうして〔那裏〕」を使用して反語表現で漢訳した。ここは孟樸の工夫なのだろう。だが、ソーヴ夫人が「違うのでしたら〔不是〕」というのだから、アンリは「違う」と発言している。つまり、冒頭は、原文のままに翻訳して「今日不是...」とすれば何ら問題もない箇所だ。わざわざ反語にすることはないように思う。曾孟樸はそう翻訳したかったのだから、私が指摘するのは余計なことかもしれないが。

もうひとつ、「道」を使ってセリフの主を明示する。

当時の中国では、文章作成に関する記号の使用規則があるわけではない。あるいは、規則はまだ定着していなかった。従来の表示方法を遵守している。せいぜいが「」を傍点に使う、あるいは固有名詞に傍線を引くくらいだ。曾孟樸の該翻訳は、段落の字下げもなければ、改行すらほどこさない（例外は第2節にある。21-22頁の短

文2字さげ。また記号「…」の使用が27、29、34頁の3カ所に見える)。林訳も同じだ。

そういう習慣だから、人物が会話をかわすといってもカッコ記号を基本的に使わない。漢字が連なっているだけだから誰の発言か区別がつかない。そこで採用されたひとつの方法が、話者のあとに「道」(林訳では文言の「曰」)をいちいち補うことだ。読者にとっては発言の合図だからわかりやすい。ただし、上のように翻訳するととなるとわずらわしい。

このように説明しながら、カッコが1カ所だけすでに出現していることを読者はお気づきだろう。ギーズ公のラテン語だ。ラテン語原文を示し、その意味を説明する箇所にカッコを使用している。ただし、それはあくまでも例外にとどまった。

アンリがソーヴ夫人の部屋を訪問すると約束したちょうどその時だ。マルゴがギーズ公にラテン語で「今夜、いつものように」と答えた。ここは、原文のラテン語を省略し漢訳のみを示している。そうであるならば、前の部分のラテン語原文も出す必要はなかったのではなかろうか。

ここまでで20頁を費やす。婚礼をすませたアンリとマルゴは、その夜をそれぞれの愛人とすこす約束をした。

曾孟樸の翻訳は、ページの終りでそのまま中断して次号に続く。

連載といっても現在のように区切りのいいところで終らせない。『小説林』は活版洋装の雑誌だが、先行した活版線装の『繡像小説』と同じ連載形式を採用している。すなわち、連載終了後、ページをばらして作品ごとにまとめることができるように工夫している。そうすれば各作品の単行本を自作することができる。また、出版社もそうした単行本を刊行した例がある。

「シャルル[沙爾]」で切れて雑誌次号の連載冒頭21頁は「9世[九世]」からはじまる。

シャルル9世と母后は退出する。コリニー提督とコンデ公は、新教の貴族たち400名に守られて退出した。それに対して群衆のなかから低い怒声があがる(曾孟樸はこの部分を省略した)。一方、ギーズ公がロレーヌ州の貴族と旧教徒をひきつれて、民衆のあげる喝采のなかを出ていった。

孟樸が省略して書き換えた箇所を郝運らの漢訳を示して比較する。現代の漢訳は、原文に忠実であるから参考になる。

まず曾孟樸訳から示す。

【曾孟樸】高利尼將軍給龔丹王領了四百名新教的紳士。一路交頭接耳。講着今日意外的光寵。21頁

コリニー將軍はコンデ王とともに新教の貴族400名を率い、道中ひそひそと本日の意外な光栄について語った。

曾孟樸は、民衆の新教徒コリニー提督らに対する反感を省略した。そのかわり、ふたりが会話をしており、この部分は孟樸の加筆である。原文に忠実な翻訳ではない。現在の漢訳を見てほしい。

【郝運ら】海軍元帥和徳・孔代親王在四百多個胡格諾教派的紳士護送下穿過人群，一路上都可以聽見從人群中發出的低声詛呪。18頁

提督とド・コンデ公は、ユグノーの貴族400人あまりが護衛するもとで群衆なかを通り抜けた。その間ずっと群衆のなかから発せられる低い罵りのことばを耳にすることができた。

ルーヴル宮を取りまいた民衆は、新教徒を呪い旧教徒に向かっては歓声をあげる。この対比が示されるのは、ある意味がその裏に隠されているからだ。この日から1週間後に発生する聖バルテルミーの虐殺に民衆も参加する。その環境がすでにできあがっていることを暗示している。何気ない部分に、伏線がはられているとわかる。

大デュマは、小説の冒頭ですでに1度予告している。曾孟樸は、冒頭で無視し、2度目の箇所も省略してしまった。なぜ、この重要な部分を削除するのか。わけがわからない。同時に、孟樸の漢訳が原文に忠実だという従来の評定に、疑問を感じる。

第2節である。

題名は「ナヴァール王妃の寢室 LA CHAMBRE DE LA REINE DE NAVARRE.」だ。曾孟樸は「新婚夫婦の部屋 [ 洞房 ] 」と漢字2字に翻訳した。第1節が「婚讌」で2字だから、それにあわせたのだろう。こちらも、意味が微妙に異なる。原文が意味するのはもともとマルゴの寢室である。かならずしも新婚夫婦の部屋とは限らない。結婚したら別の邸宅に移ってもいいようなものだ。しかし、形だけの政略結婚だから、夫婦といっても従来通りの場所で別々に生活していると考えてよい。

孟樸の漢訳は「さて [ 却説 ] 」ではじまる。これも章回小説の習慣である。書き

加える必要もない。曾孟樸は、まだ古い習慣を捨てきれないらしい。

ギーズ公は、自宅にもどり着替えた。そのとき、身に危険が迫っていると警告する手紙を手にする。忠告にしたがいそれなりの防具を身にまとい、夜中の1時にルーヴル宮をたずねる。マルゴ王妃との約束をはたそうというのだ。

原文には存在しない部分がある。ルーヴル宮をとりまく風景について、曾孟樸は自分の考えで加筆した。

【曾孟樸】看看天上。重雲澆墨。細雨如酥。迷迷茫茫。正辨<sup>ママ</sup>[辨]不準方向。忽然在雲縫裏閃出一道電光来。照得眼前灑灑的只是摇晃。23頁

空を見れば重なった雲は墨を流し、こぬか雨はやわらかい。ぼんやりとして方向がわからなくなったとき、ふと雲間から稲光がして目の前に水がただよいただ揺れているのを照らし出した。

雨降りか。揺れているのは、めぐらされた溝（あるいは堀）のなかの水だというのだ。これはおかしい。なぜなら、原作ではここは水のない溝であるからだ。ギーズ公はそこに降りていって縄ばしごを使い2階にあるマルゴの部屋へ忍び込むという手順である。

原文には存在しない不必要な風景描写を加える。別の所では、原文の重要な箇所を省略する。これでは、忠実な翻訳というわけにはいかない。

マルゴがギーズ公をルーヴル宮に呼んだのは、自分があたえた恋文のなかの1通を取り戻すためだった。ラテン語の会話にでてきた「持ってきます。持ってきました」というのは、この手紙を指している。マルゴの兄シャルル9世が、ギーズ公を殺すよう命令したという内容だ。

【曾孟樸】你該記得。那一回王看着我們的愛情。要借着我攪破你給葡萄牙公主的婚姻。一天王叫了葡公主的兄弟来。手拿着兩把劍。給他看。還对他說道。這一把今晚殺瞿斯。那一把明日就殺你哩。我一聽這些話。就写信通知你。27-28頁

おぼえておいででしょう。あの時、王は私たちの愛情を知り、私がポルトガル王女との婚姻をぶちこわそうとしているのを利用しようとしたのです。ある日、王はポルトガル王女の兄弟を呼びだし、手に2本の剣を持って彼に見せるとい

いました。これで今晚ギーズを殺せ。もうひとつで明日お前を殺す。私はそれを聞くと、すぐさまあなたに手紙を書いてお知らせしたのです。

細かいところから。ギーズに二重傍線を施している。その必要はない。つけるとすれば、人名だからただの傍線でよい。誤植だろう。

王、すなわちシャルル9世がギーズ公殺しを命令した、という内容に誤りはない。だが、周辺に不確かな部分が出現する。

「葡萄牙公主」は、ポルトガル王女で正しい。問題は、つぎの「葡公主的兄弟」だ。前がポルトガル王女だから、ここはその省略形を使った「ポルトガル王女の兄弟」だとしか理解のしようがない。そうであれば、奇怪である。ポルトガル王女の兄弟にギーズ公殺害を命令する。しかも、王自身がその兄弟を殺す、と脅迫している。シャルル9世はポルトガル王女の兄弟に命令することができるのか。おかしい。また、ギーズ公暗殺が失敗した時、し損じた人間を殺してやる、というのが普通だろう。成功か否かにかかわらず殺す、では脅迫にしても理に合わない。その部分について、現代の漢訳を参照しよう。

【郝運ら】在那封信里我对您説，国王发现了我們的愛情，而且发现了我千万百計阻止您限葡萄牙公主結成夫妻，於是把那個私生兒兄弟德・昂古列姆找来，指着兩把劍对他説，‘用這一把今天夜里去殺死亨利・德・吉茲，否則我明天就用另一把殺死你。’這封信在哪兒？24-25頁

その手紙で私はあなたにお知らせしました。国王は私たちの愛を知り、また私があなたとポルトガル王女が夫妻になるのをどうしても阻止しようとしているのを知って、あの私生児のド・アングレームを呼びだし、2本の劍を示していったのです。「これで今夜アンリ・ド・ギーズを殺せ。さもなくばもうひとつで明日お前を殺してやる」。その手紙はどこにあるのですか？

曾孟樸の漢訳では「ポルトガル王女の兄弟[葡公主的兄弟]」としてある箇所である。郝運らの翻訳は、「あの私生児のド・アングレーム[那個私生兒兄弟德・昂古列姆]」だ。突然、別の人物が出てきたのだから読者にとっては何のことかわからない。親切な郝運らは、それに注釈をつけて説明する。「ド・アングレーム(1551-1586)：フランス国王アンリ2世の私生児。その母はスコットランド女王メ

アリ・スチュアートの女官フラマン・ド・ライウエストン嬢（音訳）である」（25頁）

これを見ると私生児とは、シャルル9世の異母兄弟ということになる。そうであれば呼びつけて暗殺を命令し、それに失敗すれば殺してやる、というのもありそう。なにしろシャルル9世はフランス国王なのだから。

以上に照らせば、孟樸が「ポルトガル王女の兄弟」を出してきたのは誤りとなる。

そこに予想もしなかったことに新郎のアンリ・ド・ナヴァールが訪ねてきた。マルゴは、あわててギーズ公を秘密の小部屋に隠す。動揺して受け答えが十分にはできない。その状況を曾孟樸は加筆して説明する。原文には存在しないことはいうまでもない。

看官。須知道。凡人当兩兩對語時。發言的機鋒緊逼。答語的詞源忽窮。沒奈何了。只得借着幾個發語辭。当他做擋陣牌。你看此時馬哥公主。硬掙了半天。却只說了幾個但字。就是這個道理了。32頁

皆様、ご承知置き下さい。おおよそ、ふたりで会話をしているとき、発言する人が緊迫して切り込むと、答える人はことばにつまる。しかたなく、いくつかの発語のことばを借りて言い訳にせざるを得ない。この時のマルゴ王女をご覧なさい。長い間むりやり懸命になって、ただいくつかの「しかし」をいうだけ。そういうわけなのです。

訳者が突然でてきて、登場人物の心理を説明してしまった。曾孟樸は、そうすることが読者には親切だと考えたものか。余計な加筆だった。

誤訳だとはいえないが、微妙に原文とは異なる漢訳にした箇所もある。アンリ・ド・ナヴァールの発言だ。

Le roi me hait, le duc d'Anjou me hait, le duc d'Alençon me hait, Catherine de Médicis haïssait trop ma mère pour ne point me haïr. p.21

国王はわたしを憎んでいる。アンジュー公はわたしを憎んでいる。アランソン公はわたしを憎んでいる。カトリーヌ・ド・メディシスはわたしの母をあまりにも憎んでいたから、やはりわたしを憎んでいる。42頁

アンリ・ド・ナヴァールは、周囲から憎まれ脅かされているといたいのだ。  
以下は、曾孟樸訳である。

恨我的人多着呢。第一就是王。再者唐麻公。亜倫森公。那個不恨我。高丹璘太后。因為恨了我。所以連我娘都帶累了。33頁

私を憎む人は多いのです。はじめは王です。つぎはアンジュー公、アランソン公で、誰が私を憎まないといえましょう。カトリーヌ皇太后は、私を憎んでいますから、私の母も巻き添えにしました。

国王シャルル9世、およびアンジュー公、アランソン公ら3人の母親はカトリーヌ皇太后にほかならない。彼女は、アンリ・ド・ナヴァールの母親を毒殺した、と大デュマの「王妃マルゴ」では噂されていることになっている。それほど憎悪していたという意味だ。だから、孟樸が訳したのは、順序が逆になる。

マルゴの発言途中でページは終了している。次号の分はすでに活字に組まれていた、あるいは翻訳原稿はできていた。だが、『小説林』雑誌はこの号で停刊する。曾孟樸訳「王妃マルゴ」は、34頁でもって中断した。小説林社（または新世界小説社）から単行本（1908）が出たらしい。残念ながら、私は該書を見る機会を得ていない。

もうひとつの曾孟樸訳「王妃マルゴ」

もうひとつと書いたが、実は前出「馬哥王后佚史」（以下、前訳と称する）とひとつつながりである。

清末小説研究会編『清末民初小説目録』（中国文芸研究会1988.3.1。以下、目録初版という）の855頁には、以下のように示した。

X776\* 血婚哀史

（法）大仲馬著 病夫（曾孟樸）訳

『時報』1912.12.14-20

ALEXANDRE DUMAS, pere 著

上記の連載時期は、その一部分で、開始と終了は不明



『時報』1912.9.16

もう20年も前のことになるのか。『時報』のマイクロフィルムが作成されるはるか以前のことで。

私は、たまたま『時報』の原紙を少しだけ入手していた。それに曾孟樸の翻訳が掲載されている。目録初版に掲載し、上のように注記した。前出「大デュマ著作目録 [大仲馬所著書目]」にもその題名「血婚哀史」は見えない。大デュマの原作であることはわかる。しかし、それが「王妃マルゴ」だとは、その時は気がつかなかった。ゆえに原作への言及はない。

本稿を書きはじめてから『時報』に翻訳があったことを思い出す。手元にある新聞連載「血婚哀史」は一部分であるが、「王妃マルゴ」にほかならない。

韓一宇『清末民初漢訳法国文学研究(1897-1916)』(北京・中国社会科学出版社2008.6)を読んだのは、そのあとのことだった。フランス語に堪能な韓一宇だけのことはある。該書には、詳細な調査結果が詰め込まれている。「血婚哀史」の原作が「王妃マルゴ」であると指摘されているのはさすがだ。

そこに注がほどこされており、私の名前がでている。読んで少しの違和感をおぼえた。

樽本氏は『(二十世紀中国文学) 大典』にもとづき1912年12月14-20日と記録しているが、『時報』を調べるとその連載の開始は1912年9月16日であり、停止は見たもの(12月20日まで)に限られるから未詳である。(中略)1908年の訳本の改名復刊に違いない。320頁

なんということもない。論旨のうえで重要な箇所ではないし、「王妃マルゴ」の曾孟樸訳とは直接にかかわるものでもない。だが、目録初版と『大典』の関係について、韓一宇が誤解しているらしいのが気になるのだ。

韓一宇が書いている新聞紙上における連載開始の月日は、そうなのだろう（後に私は国立国会図書館関西館所蔵のマイクロフィルムで確認した）。ただし、私は、陳鳴樹主編『二十世紀中国文学大典（1897-1929）』（上海教育出版社1994.12）にもとづいて月日を書いたのではない。その逆である。

私の手元にある実物がそうになっているから「開始と終了は不明」だと説明した。『大典』が同じ日付を示しているのは、目録初版を引用したとしか考えられない\*14。だいいち、「血婚哀史」を掲載する文献は当時は存在しなかった。目録初版を除いては、ということだ。

1912年9月16日付『時報』の「小説」欄に題名と原作者、訳者の名前を掲げている。

冒頭に「訳者附識」があり、原作が「馬哥王后」であると説明している。ここでは元の題名にある「佚史」を省略する。また、『小説林』に連載したことを書いていないし単行本で刊行したことに触れない。翻訳文は、『小説林』掲載のものと基本的に同じだ。少しの手直しがあるのは、単行本でそうしたのか、それとも『時報』連載時のものかは不明とせざるをえない。

『小説林』連載と異なるのは、以前にはなかった「巻」を表示する。また、回目をつけておおよその内容を示すのは、章回小説で使う手法だ。

私が見た限り『時報』1912年12月31日付までの連載になっている。

掲載しない日もあることをつけ加えて一気に1912年12月14日付にとぶ。

「巻一 第十回 馬哥憐踐約救親夫 查爾斯回心矜弱妹」と回目がつけられている。その意味は、「マルグリットが約束を実行して夫を救い、シャルルが改心して弱い妹を尊敬する」である。フランス語原文は「10 死ぬか、ミサか、バステューユか！ MORT, MESSE OU BASTILLE.」となっている。シャルル9世が、義弟アンリ・ド・ナヴァールに銃をつきつけて叫ぶことばだ。死ぬか、旧教に改宗するか、監獄行きか、どれかを選択しろということ。それに比較すれば、漢訳は大きく違っている。

前訳は「第1節 婚讒」「第2節 洞房」だった。「節」を「回」に改め、しかも回目を採用している。これが、目立つ変更だ。

回目が掲げてあるからといって、ここからはじまるわけではない。新聞連載にあたって、毎回この回目を示している。文章の最後に（第一巻終）とある。第10章の終わり部分を示す。

旧教徒が新教徒を襲撃し大虐殺がはじまった。シャルル9世は、義弟アンリ・ド・ナヴァールを呼んだ。上記みつつのうちからひとつを選べと義弟に迫った。回答を躊躇していると母后カトリーヌ・ド・メディシスがいつのまにか部屋に入ってきている。アンリ・ド・ナヴァールは理解した。すべての陰謀の黒幕は、このカトリーヌ・ド・メディシスだったのだ。

その時、あえぎながら飛び込んできたものがある。マルゴである。みなが驚いて声をあげる。曾孟樸が変わった漢字使いをしているので示す。

南藩王道。噲一馬哥憐。国王道。唄一馬哥。太后道。嘻一吾女。

ナヴァール王がいった。あッ マグリット。国王がいった。やッ マルゴ。皇太后がいった。ひッ 娘か。

本文縦組みのなかに漢字の「一」が倒して使用されている。横組みの本稿では目立たない。想像していただきたい。現在の記号でいえばハイフン「-」のかわりだ。話者と発言を区別して「道」を使うのが孟樸のやり方であることは述べた。

問題は、このあとに加筆をしているところだ。

你道馬哥如何突然而来。原来当夜滿宮处处都有守兵。却没有防到麦旦倫的小門。也是南藩王命不該絶。竟被馬哥尋了進來。恰遇着南藩王危急的時候。

マルゴはどうして突然やってきたのでしょうか。その夜、宮殿全体はいたるところに衛兵がいたのだが、なんとマドロンのいる小さい入り口までは守ってはならず、ナヴァール王の命令でも閉めてはならないということだった。ついにマルゴに探し当てられ入ってこられたというわけ。まさにナヴァール王危急の時に会ったのだった。

マドロン[麦旦倫]とは、国王の乳母だ。小部屋で聖書の詩篇を小声で歌っていたのをマルゴが耳にし、そこに入り口があることを察知した。そういういきさつである。

曾孟樸は、原文を無視して独自に説明を加えている。読者にとってはその分、理解しやすくなったということはいえる。だが、ここでも「原文に忠実」なのか、という疑問が出てくるのをおさえることはできない。

第1巻の締めくくりはこうだ。「ナヴァール王の生命はいかがなりますか。あとは次回のおたのしみ [ 欲知南藩王性命如何。且聽下回分解 ]」。そのまま章回小説の決まり文句である。前訳には見るができなかった。そういう意味では逆行している。林紘がはるか昔に捨ててしまい見向きもしなかった書き方だ。1912年といえば時代は変わり、すでに中華民国である。新しい工夫があってもいいのではないか、と私は思う。

#### 曾孟樸訳「王妃マルゴ」についての結論

曾孟樸の翻訳は、原文に忠実であるという。この高い評価がすでに定着している。そう考えて彼の漢訳を見れば、出だしと終りは章回小説の決まり文句を使用して旧態依然だ。これはフランス語原文には存在しない。孟樸による勝手な加筆がある。極端な誤訳はないとはいえ、それでもやはり小さな間違いは存在する。いくつかの省略があるのを見逃すことはできない。

白話と文言の違いを視野にいれても、孟樸訳は、質的には林訳と同等である。これが曾孟樸の漢訳「王妃マルゴ」についての私の考えだ。 (次号完結) 罇

#### 【注】

- 1) 樽本「曾孟樸の修学」『清末小説閑談』所収
- 2) 李華川『晚清一個外交官的文化歷程』北京大学出版社2004.8 北京大学比較文学学術文庫

最近刊行された陳季同著作の翻訳には以下のものがある。

黄興涛、周邁、朱涛、劉雲浩訳『中国人自画像』貴陽・貴州人民出版社1998.2

「陳季同法文著作訳叢」

李華川訳『吾国』桂林・広西師範大学出版社2006.1

韓一宇訳『中国人的快樂』桂林・広西師範大学出版社2006.1

段映虹訳『中国人自画像』桂林・広西師範大学出版社2006.1

李華川、凌敏訳『中国人的戲劇』桂林・広西師範大学出版社2006.1

段映虹訳『巴黎印象記』桂林・広西師範大学出版社2006.3

- 3) 時萌「曾樸生平系年」(『曾樸研究』上海古籍出版社1982.8. 25頁)では、小説林社創設を1904年にする。だが、翻訳書に1903年刊行のものがすでに2点ある。実物を確認していないから、そのままにしておく。また、同文29頁に、学校参考書を専門に刊行するため1907年宏文館を増設した、とある。小説と参考書の2方面に分けるといいう営業方針は、すでに旺盛な出版活動を展開している商務印書館にならったものか。
- 4) 時萌『曾樸研究』29頁と115頁に、周瘦鵑の文章から引用がある。「悼念曾孟樸先生」(初出不記)だ。「読到他所訳大仲馬名作《小晶島伯爵代序》の一篇《大仲馬小伝》,以文言写成,十分古朴,更使我愛不忍释」。だが、曾孟樸は「モンテ・クリスト伯[小晶島伯爵]」を翻訳していない。だから「大デュマ伝」はその代序ではないのだ。周瘦鵑の誤解だろう。時萌がこれをなぜ訂正しないのか不明である。また、時萌は同じ115頁において孟樸訳「馬哥王后佚史[王妃マルゴ]」の原著者をユゴーと間違う。
- 5) 郭延礼『中国近代翻訳文学概論』漢口・湖北教育出版社1998.3. 417頁 / 修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第2版第3次印刷。334頁。郭延礼の該書の一部である「七、伍光建、曾樸与法国文学翻訳」は、羅選民主編『外国文学翻訳在中国』(合肥・安徽文藝出版社2003.12. 182-201頁)の第3章第4節にそのまま収録されている。
- 6) 茅盾「大仲馬評伝」(法)大仲馬原著、伍光建訳述、茅盾校注『俠隱記』68回1冊 商務印書館1925.3初出未見 / 湖南人民出版社1982.9。『茅盾全集』第33巻外国文論五集 北京・人民文学出版社2001. 144-146頁。また、『茅盾全集』第30巻外国文論二集に所収の「一七 大仲馬的《俠隱記》」(『漢訳西洋文学名著』上海・亜細亜書局1935.4初出未見)も同趣旨。
- 7) 時萌「曾樸与法国文学」『曾樸研究』117-118頁
- 8) 郭延礼『中国近代翻訳文学概論』416頁 / 333頁
- 9) 郭延礼『中国近代翻訳文学概論』416頁 / 334頁。なお、郭は引用文につづけて呉琴一「如是我聞<魯男子>」(初出不記)を時萌『曾樸研究』49頁から孫引きしている。商務印書館の張元済が発言したとして次のようにいう。当時の翻訳では林琴南の古文と曾孟樸の白話が、理想の要求に合致できるものだった。商務印書館の原稿料は林紓と曾孟樸が最高水準の1千字洋16元であった、と。

以下は樽本の説明。商務印書館における林紘の翻訳料は、たしかに最高だった。しかし、金額が違う。1千字6元だ。しかも、商務印書館は曾孟樸の著作を刊行した事実はない。郭延礼がこの簡単な事実を知らないはずはないと思うのだが。呉琴一の記憶違いを、なぜかしら訂正もせずそのまま引用している。

- 10) 単行本が上海・小説林社(1908)、あるいは新世界小説社(1908)から出ているというが未見。
- 11) ALEXANDRE DUMAS "LA REINE MARGOT" CALMANN LÉVY, PARIS. 1892.  
2冊本を使用
- 12) アレクサンドル・デュマ作、榊原晃三訳『王妃マルゴ』上下 河出文庫1994.  
10.4。また、つぎの訳を参照した。アレクサンドル・デュマ原作、鹿島茂編訳『王妃マルゴ』(抄訳)文藝春秋1994.12.20
- 13) ラテン語の attuli は、私は運んだ、という意味だという。フランス語でもそうだ。これを踏まえて曾孟樸が漢訳した「我拿来。我自己拿来」について説明する。ここに見える複合動詞「拿来」には、動作が完了したことを意味する接尾辞をともなわない。だから、日本語には訳さなかった。郝運ら共訳では、「私は持ってきました[我带来了]」「私は自分で持ってきました[我親自带来了]」としている。11頁
- 14) 陳鳴樹主編『二十世紀中国文学大典(1897-1929)』(上海教育出版社1994.12.3頁)の「総序」には次のようにある。「樽本照雄編『清末民初小説目録』によると、著訳の2種類は合計すると9,756種にも達する」。陳が目録初版を参照したのは間違いない。

(たるもと てるお)